



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

# 日本の文学

1

坪内逍遙  
二葉亭四迷  
幸田露伴

中央公論社

坪内逍遙  
二葉亭四迷  
幸田露伴

昭和44年12月25日初版印刷

昭和45年1月5日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社  
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社  
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂  
口絵写真印刷 東京プロセス株式会社  
本文用紙 本州製紙株式会社  
クロス 日本クロス工業株式会社  
製函 加藤製函印刷株式会社  
函ボール 佐賀板紙株式会社  
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地  
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

坪内逍遙

一説  
三歎 当世書生氣質

7

二葉亭四迷

浮雲

171

小説総論

294

余が言文一致の由来

298

幸田露伴

風流伝

303

五重塔

運命

連環記

注解

解說

年譜

口繪

挿画

〔当世書生氣質〕

〔当世書生氣質〕

伊藤整

歌川国峰

歌川国峰

葛飾某

長原孝太郎

武内桂舟

336

390

463

510

536

551

「浮雲」

月岡芳年

「風流伝」

尾形月耕

「五重塔」「運命」「連環記」

平福穂庵

羽石光志



坪内逍遙





一説  
三教  
當世書生氣質

一説  
當世書生氣質はしがき

英の句レイク翁イギリス垂リボン翁などは批評家の尤物株なり古今の小説家の著作を評して勝手放題なる小言もいまた非評もいわれたりきさはあれ件の翁たちにお説のよくなる完全なる稗史を著きてよと乞いたらんには予にはできぬと逡巡して稗史は著かて頭を掻くべしこれ他なし小説の才と小説の眼と相異なるがためなるのみ眼ある者必ず才あるにあらず才ある者いまだ必ずしも眼あらざるなり予このごろ小説神髓と言えり書を著わして大風呂敷をひろげぬ今本編を綴るにあたりて理論の半分をも實際にはほとほと行い得ざるからに江湖に対して我ながらお恥かしき次第になんただし全篇の趣向のごときはおさおさ傍觀の心得にて写真を旨としてものせしから勸懲主眼の方々にはあるいはお氣に入らざるべし予はあえてこの書のうちより模範となるべき人物をば求めたまえと乞う

にあらず他の行見てわが風なおし前の人車の覆るを見て降り坂なら降りたまえと暗に読者に乞うのみなり作者は勸懲を主とせざれども此を訓誨の料にすると此を褒賞の資にするとは読者輩の心にあり餘は味わいと美き一種の食べ物にほかならねど用いようにて孝行息子が親を養う良薬にもなり盗跖が窃盜のすてきな材料にもなりしと聞く作者の血大の眼を開きて学生社界の是非を批評しこの書のうちに納めたれば読者輩は地球大の智慧の袋の口を開きて是非曲直を分別して陋劣きを去り高尚きを取る實際の用に供えたまわば美術の名ありて微術というべき予が未熟なる稗史のうちにも人の氣格を高うすとう自然の効用のなからずやはあなかしこ心して読ませたまえ十八年の五月という月ようように散りてゆく庭前の八重桜に落ち残る月の下に

春のやおほろしるす

第一回

鉄石の勉強心も。変るならいの飛鳥山に。

物いう花を見る。書生の運動會。

さまざまに。移れば換る浮世かな。幕府さかえし時勢には。武士のみ時に大江戸の。都もいつか東京と。名もあらたまの年ごとに。開けゆく世の余沢なれや。貴賤上

下の差別もなく。才あるものは用いられ。名を挙げ身さえたちまちに。黒塗馬車にのり売りの。息子も鬚を貯られば。何の小路といかめしき。名前ながらに大通路を走る公家衆の車夫あり。栄枯盛衰いろいろに。定めなき世も智恵あれば。どうか活計はたつか弓。春めくあれば霜枯れの。不景気に泣く商人あり。十人集れば十色なる。心づくしや陸奥人も。欲あればこそ都路へ。栄利もとめて集い来る。富も才智も幅濶の。大都会とて四方より。入りこむ人もさまざまなる。中にもわけて数多きは。人力車夫と学生なり。おのおのその数六万とは。七年以前の推測計算方。今はそれにも越えたるべし。到るところに車夫あり。赴くところに学生あり。かしこに下宿所の招牌あれば。こなたに人力屋の行燈あり。横町に英学の私塾あれば。十字街に客俵ちの人車あり。失敬の挨拶は。ゴッサイのかけ声に和し。日和下駄の痕は。人車の轍にまじわる。げにすさまじき書生の流行。またおそろしき車の繁昌。これしかながら腕づくにて。金も名誉も意のごとくに。得らるるからの奮発出精。まことにめでたきことなれども。もしこの数方の書生輩が。皆大学者となりたらんには。広くもあらぬ日本国は。学者で鼻をつくなるべく。また人力夫がどれもどれも。しこたま顧客を得たらんには。わが緊要なる生産資本も。無為に半額は費えつべく。されども乗る客勤くして。手を空しゅう

する不得錢多く。また郷閥をたちでる折。学もし成らずば死すともなど。いうたその口で藤八五門。うって変わった身持放埒。卒業するものまれなるから。この容体にて続かんには。まだ百年や二百年は。途中で学者にあらしたしこ。額合せする心配なく。まず安心とはいうものから。その当人の身にとりては。遺憾千万残念至極。国家のためにもあつたらしき。御損耗とぞ思われける。かく書生輩が志を。得遂げざるには故あれども。その原因の關係塩梅。すこぶる隱妙不可思議にて。皆一樣とはいうべからず。むかし氣質のチョン髷連中。もしくは地方の親たちなどが。かつておもしろいも。寄らない幕。その隱密なる魂胆をば。写しだせる物語も。それとはいわず語らずして。読む人々に悟らしむる。覆車の誠め因果の關係。善きも悪しきもあからさまに。作者が自儘の考案もて。いわぬが花か読む人が。自得るも花か一花をいでて。松にしみこむ霞かな。その春霞たちそめて。景色ととのう飛鳥山。山も麓も一面に。花と人にと埋もるる。四月なかばの賑わいは。上下貴賤おしなべて。ともに楽しむ昇平世の。めでたきしるし著き。

○毎度ありがとうお静かにいらつしやいませしの。愛敬を背にうけて。扇屋の店をたちいづるは。男女七人の上等客。微酔い機嫌の千鳥足にて。先に立ちたる一個の客はこの一団の檀那と見え。素人眼の鑑定では。さる銀行の

取締ととしまりか。さらずは米屋町辺かと。思おもわゆる打いで扮ばん。米沢よねざわの羽織うわじに。じみな琉球りゅうきゅう紬ちゆうの薄綿うすわた入れ。一カワウソンの帽子ぼうしを肩深かたふかにいただきたるは。時節柄ときせふがらすし暖あつそうなり。年としごろは四十三四。金時計かねどけいの鍵かぎを。胸むねのあたりあたりに。ちらちらとばかり見みせたるは。昔むかしゆかしき通人とりのりなるべし。今いま一個は。年としのころ三十五六。これも銀行ぎんぎんの役員やくいんならずは。山の字のじのつく商人あきやうどなるべし。粧服みたりも相あ応おに立派りつぱなれども。前の檀那だんなには。二三目にさんめおいた口くちぶりなり。残のこる一個は。年としのころ二十六七の好男子このおとこ。官員くわんいんとも見みえず。商人あきやうどともつかぬ言語もご恰好かこう。まず素人すじんの鑑定かんていでは。代言人だいなかとおもわれたり。ときならぬ白しろチリちりの襟巻えりまきに。狸虎りこの帽子ぼうし。黒くろ七子ななこの紋附もんづき羽織うわじは。少々少々柔弱じやくじやくけすぎた粧服みたりなり。ことに南部なんぶの薄綿うすわたとは。ちと受けかぬる。トわるくはいえど。中肉ちゆうにくにして身幹みかん高く。色いろしろく鼻筋はなぢとおり。俳優はいゆうでいわば松島屋まつじまやの兒こへ。チイ高たかの眼まなこを。嵌はめ込んだといふ兒容こがらみなり。まずまず午前ごぜんの好男子このおとこなれども。とかく気取きとりたる癖くせあるのみか。弁舌べんぜつがあまり爽快すうかいならねば。ただ何なにとなく甘あまつたるく聞きえて。運うんがわるいと。ときどきには。イケすかないよの御託宣ごたつせんに。縁ゆかりがありそうなる人物じんぶつなり。婦人おんな二個は教寄屋きやくしや町か。新橋しんばしあたりの芸妓げいぎと見え。一個は年としごろ二十五六。一個はようよう十七八。いづれもすこぶる別製べつせいなれども。若わかきはことさら曲者まがらにて。まだ赤襟あかえりの色いろさめぬ。新妓しんぎなりとは見えながらも。客きやくをそらさ

ぬ如才にょざいなさ。花はなの巷ちまたの尤物まればとは。その挙動よちだにも知られたり。その容姿ようさはいかにというに。瘦肉すうにくにして背も低ひかからず。色いろはくつきりと白しろうして。鼻筋はなぢ通り。眼まなこはちとばかり過鋭かえいあれど。笑わらうところに愛嬌あいせうあり。紅べにはげたれども紅べになる。唇くちべといひ。眉形まゆがたといひ。故人こじんとなりたる田たの太夫たゆうの舞台兒ぶたいごに髻髷けいゑたり。されば。どこやら愁うれい兒ごに見みらるる廉れんもなきにはあらねど。笑わらう面に愛嬌あいせうあるから。結句けつご双方相照さうしやうしやうして。趣おもむをなす変化へんげの妙たぎあり。これらはいわゆるユニテイ「統一」と。ヴァライヤテイ「変化」とを併あせ得えたる。有旨趣うしよ的てきの美兒みごぞとは。とんだ書生風しよせいふうの妄評もうへうにて。世間よこに通とおじぬ陳腐ちんぷ漢かんにこそ。芸妓げいぎの後あと辺へに引き続つきし二子装ふたごくろみの両個りやうごの男おとこは。問とわでもしるき箱夫はこぶにして。よけいな花見はなみのお荷物お荷物ぞと。腹はらでお客きやくが吐つくとは。作者さくしやが岡眼おかまなこの評判ひやうぱんなりかし。

○さるほどに件くだんの一団ひとぐみは。やおら扇屋あふかばをたちいでつつ。飛鳥橋あすかばしをば打ち渡わたりつ。岳おかの麓ふもとへ来きたりし時とき。例れいの檀那だんなはたちどまりて。若わかき男おとこを見みかえりつ。吉住きちまさん御覧ごらんなさい。ナント絶景ぜつけいじゃアないかネ。今いまからすぐに還幸えんけいとは。ちと残りおしい次第しだいだから。ドウセ車夫しやぶの待まちたせついでだ。あの霞簀せみ張はりりのあたりへいつて。さらに一喫ひとくち煙たばことしようじゃアないか(吉)実まことに夕陽せきやうに映うつずる景色けしきは。また格別かくべつと言いわざるを得えずです。園田そのださんいかがです。お伴おともをしようじゃアありませんか(園)賛成さんせい賛成さんせい。大賛おほいさんせい

成。幸い花見連も。よほど散じた様子だ。一番ずつと若返つて。鬼ごっこでもはじめようか。ドウダ。小年も田の次も。仲間へはいんな。運動になつていいぜ(年)オホホホ。いかなこつても。この人中で。妾のようなお婆アさんが(園)ヘン。イヤニ老いこんだナ。田の次はドウダ(田)姉さんがやらなけりヤア。妾だつていやですワ。男三人に女一人ではドウセかなやアしませんもの(吉)オイオイ田のちゃん。やるべしやるべし僕が尻押しをしてやるから。かつは言葉をつかへせあり。いま鬼ごっこをしておくとお座席で転ばない稽古になるよ(田)アラまた。あんな口の悪いことを。お言いなさるよ。妾はいやよ。吉住さんの尻押しは。当てにならないから(園)そうともそうとも剣呑だぜ。尻の押しかたが違つているから(年)オホホホほんとうにそうですよ。吉住さんは平生うまい口さきでもつて。所々方々の芸者やおいらんを(吉)オット大変。大層風向きがわるくなつたぞ。オイ梅公。箱夫の助け船引(梅)へへへへ今日は大層うけだちでございますね(吉)それやアそのはずよ。三国同盟で攻め寄せるんだから僕一人では敵しがたしサ(年)あんまり敵しがたい方でもありますまいよ甲楼乙楼と喰べちらかしをなさる癖に(吉)オヤ喰べちらかしをするとは(年)いいますよ角海老の(吉)まいったまいったいうべからずいうべからず(園)アハハハハ吉住

さんしきりに敗北の様子だネ(梅)とかくお胸に弱身がありましてはお達者なお口でもかかないませんものと思えます。へへへへ(吉)ナンダこの野郎。汝まで僕をいじめるな。覚えていろ。ト箱夫を撃とうとする。箱夫は笑いながら逃げ出す。(田)サアサアともかくもあちらへ参りましょう。アラ御覧なさいよ。三芳さんがたった一個。いつの間にか。茶屋に腰をかけていらつしやるよ(年)ほんとうにネイ。トいいながら。箱夫の方に向い。(年)金どん。箱夫のおまえはネ。梅どんと一所にあらへいってネ。もうじきにお帰りになるから。用意をしてと車夫にそういつておくれな(金)ヘイヘイかしこまりました。ト籠の方へゆく(田)サアサアまいりましたよ。ト二人の芸者は園田と吉住を急がしつ。言争いながら登りゆく。

○咲き乱れたる桜の木蔭に。建て連ねたる霞簷張りも。ゆうぐれつぐる群鳥と。ともに散りゆく花見客。休らう人もようように。まれなるほどの詠めこそ。またひとしおぞと打ちつぶやく。しず心ある風流男あれば。あたりかまわぬ高吟放歌。相撲綱引き鬼ごっこ。飲みつ食いつこの時まで。興に乗じて暮れそむる。春日わすれし一団あり。人数およそ十人あまり。皆十二分に酔いどれたる。兒に斜陽の映りそうれば。さるに似たれど。去りかねて。臥し転ぶ人。扶くる人ともによろめく千鳥足。あしたの

課業の邪魔になる。起きたまえとの一言にて。いよいよ書生の花見ぞとは。いと明らかにぞ知られける。

○この一仲間は。さる私塾の。大運動会の。居残りで見えて。かなたには。空虚になった孤被褥の記念碑あり。こなたには。竹皮包みの骸が。杉箸とともに散乱たり。酒をあまりに嗜まぬ者や。深く沈酔れざる書生輩は。おおかた帰りざりし跡と見えたり。その中に一個の書生あり。しいて酒をば飲まされたる。その苦しさにや堪えざりけん。はるか離れし古木の根へ。臥したおれしまま前後もしらず。この時までも熟眠せしが。春とはいえどさすがにも。黄昏ぎわの風寒み。どやどや帰る足音の。耳に入りてや起きあがる。その容体はいかにというに。年のころは二十一。瘦肉にして中背。色は白けれども。麗やかならねば。まず青白という。兒色なるべし。鼻高く眼清しく。口元もまた尋常にて。すこぶる上品なる容兒なれども。頬の少しくこけたる塩梅。髪に癖ある様子など。は。神經質の人物らしく。俗にいわゆる苦勞性ぞと傍で見ると笑止らしく。その粧服はいかにというに。この日は日曜日のことにてもあり。かつは桜見のことなるから。貯えの晴衣裳を。着用したりと見ゆるものから。衣服は層糸銘線の薄綿入れ。たしかに親父からの譲られもの。近ごろ洗い張りをしたりと見えて。襟肩もまだきれいな。鼠色になった縮緬の尻子帯を。裾か

ら糸が下りそうな。嘉平の古袴で蔵した心配。これも苦勞性のしるしと思わる。羽織は糸織のむかしもの。母親の上被を仕立て直したもののか。その証拠には裾の方ばかり。大層痛みたるけしきなり。その服装をもて考うるに。さまで良家の子息にもあらねど。さりとして地方とも思われねば。府下のチイ官吏のサン「子息」ならんか。とにかく女親のなき人とは。袴の裾から推測した。作者が傍觀の独断なり。

○さるほどに件の書生は。驚き覚めつつあたりを見れば。人もようやく散り行きて。おのが仲間の人々さえ。みな帰り去りし有様ゆえ。驚きながらも身づくろいして。麓の方へと行かんとする。背後の方よりあわただしく。走り来たれる一個の人あり。避くる間なく衝き当りつ○アラ御免なさいよ。真平御免なさいましょ。トいは女の聲なるゆえ。驚きながらもふりかえる。書生の兒見てかなたもびつくり。(女)オヤあなたは。兄さんじゃアありませんか(書)エ。お芳さんか。まことに久しぶりだネエ(女)ほんとうにしばらくでございましたネエ。何もお異りはありませんか。お父さんはお健康でいらっしやいますか。先々月ちよつとお目にかかったばかりですから。今月は是非参ろうと思つていながら。お父さんの命令もありますもんだから。ツイツイ(書)わたしはまた一昨年おまえに別れたつきり。いつもいつも掛け違つて。

おなじ東京とうきやうにおりながら（女）お目にかかることができ  
ませんもんでしたから。なおさらお目にかかりたくって  
（書）僕わががいいが。わたしだつて逢あいたくって○しかし大層  
に変わったネエ。だしぬけに逢あいたら見違えるくらいだよ。  
トいいながら。つくづくと見る。（女）ほんとうに気恥か  
しくつてなりませんワ。ト談話半ばへバタバタと。かけ  
て来るは以前の吉住。後あれてはせくる芸者の小年が。そ  
れとさとして追おいすがりつ。（年）吉住さん。チョイと吉  
住さん引。なんですネエ。お待ちなさいよ。あなたがあ  
んまり烈はげしく。おっかけなはるもんだから。御覽なさい  
よ。田たの次つぎさんが。よそのお方に衝つき当あつてお詫わびをし  
ているじヤアありませんか。そんなに田たのちゃんにか  
かうと。角海老かくゑがコレですよ。ト指さで角つをこせえて見せ  
る。（吉）ナンダ。衝つき当あつたから理屈りくつをいった。かま  
うものか。書生しやうせいめが何をいやアがる。僕わががいつて掛け合  
つてやろう。ト行きかかると袖そで引きとめ。（年）アレサ。  
先まで理屈りくつはいやアしないが。詫わびるのは当然あたりでさアネ。  
ト争まっている声が聞きえるゆえ。（田）兄あさん。いろいろう  
けたまわりたいことも。お話し申ましたいこともありませ  
けれど。今日こんにちはお客きやくと一所い所しよですから。お名残なごり惜なしいけ  
れども（書）サアサア。かまわないであちらへおいでよ。  
いずれまたその内に。トいいながら。残りおしそいな兒こ  
つき。田たの次つぎも去いりかねて。（田）兄あさん。いろいろ久ひさ

ぶりでお話わがしとうございますから。アノウ。トいいか  
けしが小声こゝろにて。（田）ドウゾ妾めかけを。一度呼よんで下さいな  
（書）エ。呼よぶとは（田）アレサ。茶屋ちやへ呼よんで下さいな。  
一年いちねんに一度や二度。兄あさんにお目にかかったからつて。  
お父ちちさんがお叱しかりもなさるまいから。内々うちうちで呼よんで下さ  
いよ。あなたも御修行ごしゆぎやう中ちゆうですから。なんでしょうから。  
アノ何なには。妾めかけがどうともしますから。トいい折園せえん田たの声こゑ  
として。田たの次つぎ田たの次つぎ。と呼よび立てられ。（田）ハイハイ。  
ただいままいりますよ○エ。エ。兄あさん。きつとですヨ  
（書）アア。トいつたきり。うっかりとしている。（田）  
さようなれば。トいいすて。田たの次つぎはかなたへ走りゆ  
く。その後ろ影かげつれづれと。打ち目護めがりいるこなたの書  
生しやうせいを。田たの次つぎが常願じやうげんのいろ客きやくか。と邪推よこしまなしたる以前の  
吉住きちぢゆう。幾いくたびとなくふりかえりて。睨にらむ眼元まなもとにおのずか  
ら。嫉妬しよとの気色けしきのあらわるるを。さてはそうかとさすが  
にも。見てとる書生しやうせいもたちまちに。面色おなほかえてぞうち見  
やる。かなたとこなたの睨にらめ競ま。蟻あと蛇へびとが挑いみあう。  
その元初はじめにも似にたりけり。かくとはしらぬ三芳さんほうと園田えんた。  
（三）オイオイ吉住きちぢゆうさん。サア帰かるべし帰かるべし（園）先  
生せんせい。モウ鬼おにごつこも終局しゆうきよくにしやしょう。何をしているん  
だ。サア行くべし行くべし。トせりたてられて余義あやぎもな  
く。心残こころなごして。麓ふもとへと。下くだる吉住きちぢゆう。引ひつ添そう芸者げしや。見送みおく  
る書生しやうせい。見みかえる田たの次つぎ。目めにかよわする相互たがひの真情まじやう。



いと切なりとは見えながら。恋とは見えぬ。恋ならぬ。中とも見えぬ兩人をば。かかる筋にはとりわけて。ぬけ目ないない小年さえ。小首かたげて不審兒。(年)ドウモ希代だヨ(田)エ。大姐。なんですとえ(年)エ。アノ何サ。さつき園田さんに戴いた物を。どこかへなくしてしまつたからサ。

○こなたになおもたつたるまま。ぼんやり思案の書生の背中。ボンと打たれて。覚えずびつくり。(書)オヤ誰かと思つたら須河か。まだ君は残っていたのか(須)オイ小町田。怪しいぞ。あの芸妓を君は知つちよるのか。ト言われて覚えす真赤にせし。顔を笑いにまぎらしつつ。(小)ナアニ僕が知つてるもんか(須)それでも。えらい久しいあいだ。君と談話をしちよつたではないか(小)エ。あれはナニサ。お客と鬼ごっこかなにかをしていて。誤つて僕に衝き当つたので。それで僕にわびていたのサ(須)そうかア。それにしても大層ていねいだなア(小)なにか(須)彼がしばしば君の方を。振りかえつて見ちよつたからサ。よッほど君をラブ「愛」しているぞう(小)アハハハハ。馬鹿ア言いたまえ。それはそうと。諸君はモウ。みんな帰つてしまつたのか(須)ウン。今ようやく帰してやつた。ドラソカアド「泥酔漢」が七八人できおつたから。倉瀬と二人で辛うじて介抱して。みんな車にのせてやつた。モウモウ幹事は願ひ下げだ。アア辛度



辛度（小）僕はまたあそこの松の木の下へ酔い倒れてい  
たもんだから。前後のことはまるで知らずサ。それやア  
失敬だったネエ。ちっとヘルプ「手助け」すればよかつ  
た（須）ヤ日輪がモウ沈むと見えるワイ。去のう去のう  
（小）倉瀬はどうしたか（須）籠の茶屋に俟つちよるじや  
ろう。宮賀がアンコンシヤス「無感覺」になりおつたか  
ら。それを介抱しちよるはずじや。アア僕も酔うた酔う  
た。アア引。酔うてはア。枕すう。美人のウ。膝ア引。醒  
めてはア。握るウ。天下のウ。権引。

作者曰く須河の言語はいかなる地方の言語なるかと不審を  
いだく人もあるべしこはいずこの方言と定まりたるものにあ  
らず書生社会に行わるる駁雑なる転訛言語と思ふべしけだし  
書生中には上方の生れにありながらわざわざ土佐方言などを  
真似る者ありて一概にいずこの方言とも定めがたければなり。

## 第二回

謹慎の気の張弓も地む。とん

だ目に淡路町の矢場あそび。

ぎょうぎょうしき人力車のゴッサイ。稚児の足元あぶ  
なく。騒々しき辻馬車の喇叭。老人は杖や失なわん。晴  
れて風だつ日の土煙には。新購の帽子ために白く。曇子  
の御者めく官員も。鼻の上に八字を画き。結びしばかり

の大島田に。埃がかかるを苦勞にして。西施の鬢みをま  
なぶもあり。これ筋違の夏げしき。げにやかくては塵除  
けに。眼鏡の橋も入要か。とうちつぶやける田舎人の。  
あだ口さえも道理なり。ころしも五月の下幹。はや暮れ  
そむるたそがれ時。講武所の横町よりいと急がしげにか  
けるは。年ごろ十九か二十あまり。人品のよき書生風。  
去年の夏買いしと見ゆる。ヘコヘコになりたる麦藁帽子  
を。あおのけざまに戴き。鼠色になりて。袖口のボタン  
は。ことごとく脱走したる。白襦袢を被たる上へ。午後  
五時ごろともいうべき。偽薩摩の単衣を被て。小倉の  
袴の。膝のあたり白やかになりて。ひだの形なしになり  
たるを。裾短かにはき。日和下駄の。きょう買いしばか  
りと見えたるを。いと荒らかに踏み鳴らしつ。風呂敷包  
みを小脇に抱きて。眼鏡橋へとさしかかる。折しも聖堂  
の方よりして。急ぎ来たれる一個の書生と。出逢いがし  
らに兒見合わせ。以前の書生は声をかけ。（書）ヤ須河。  
君も今帰るのか（須）オオ宮賀か。君はどこへ行つて来  
た（宮）僕かネ。僕はいつか話をした。ブック「書籍」  
を買いに。丸屋までいって。それから下谷の叔父のここ  
へまわり。今帰るところだが。まだ門限は大丈夫かネエ  
（須）我輩のウォッチ「時器」ではまだテンミニツ「十  
分」ぐらいあるから。急いで行きよつたら。大丈夫じゃ  
ろう（宮）それじゃア一所にゆこう（須）オイ君。ちよつ